

読書通信

第 8 號
発行人: amagata

愛知県が舞台の小説「其の二」

最近の作品では、村上春樹「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」。主人公の多崎つくるとが名古屋出身のため、たびたび小説の舞台として、名古屋が登場します。高校時代の仲良し五人組。けれども、大学二年の夏、突然他の四人から拒絶される多崎つくると。十八年後、その理由を尋ね歩く物語です。特に、このレクサスの営業所はどこか、一時話題になっていました。

五人は名古屋市の郊外にある公立高校で同じクラスに属していた。男が三人、女が二人。一年生の夏に、ボランティア活動がきっかけで友だちになり、学年が変わりクラスが分かれても、変わらず親密なグループであり続けた。

(中略)

レクサスのショールームは名古屋城に近い静かな一画にあった。広々としたガラスのウィンドウの中には、スポーツカーから四輪駆動車まで、色とりどりのレクサスの新車が晴れがましく並んでいた。

次に、堀田あけみ「1980 アイコ十六歳」。中村高校在学中に河出文藝賞を受賞した作品。名古屋を舞台に、弓道部に所属するアイコの学園生活を描いています。作者は現在相山女学園大学教授。

「いいでしょう。震度5になったら起きて、ちゃんと逃げるわ。ゆうべなんて、震度3だがね。それに、あたしが寝とつても、べつに迷惑かかれせんがあ。あんたらみんな、いざという時には、あたし放つといて逃げるでしょう。」

(中略)

「そうだね。安心していいわ。いざつう時になるまでもなく、あんたのことは放つとくで。」

〈「読書の記録」より〉

【有島武郎「一房の葡萄」】

▽主人公の男の子は、とても素直で優しい子だなと思った。彼が泣いた時、先生がとても優しく接していた場面は心が温かくなった。ジムも、盗まれた事をひきずらずに仲良くしてくれるので優しい良い子だなと思った。(N・I)

▽絵の具を盗んでしまった「僕」をなぐさめる先生の優しさと、笑顔で握手をするジムと「僕」の深い友情を感じた。(K・T)

▽小さい子なりの、心中の欲と葛藤がとても分かりやすく表現されていた。物語に出てくる葡萄がより友達関係を分かりやすくしていた。(K・M)

▽独特な書き方をしていた。箇条書きのように感じた。物語の僕と自分が似ているように感じた。(H・I)

▽通っていた学校の周りの景色はとてもきれいなのに、心の中はジムの絵の具が「どうしてもほしい」「盗んでしまった」とどんどん暗くなっていく表現がすごく印象的でした。(M・K)

▽「教場」や鐘の「かんかん」と鳴る音の差から時代の風景が見えた。(A・O)

□ クラス文庫より □

「異邦人」



アルベール・カミュ

「きょう、ママンが死んだ。」
——二十世紀、不条理小説はここから始まった。母の死の翌日海水浴に行き、女と関係をつ結び、映画を見て笑い転げ、友人の女出入りに関係してアラビア人を殺害する。裁判ではその動機を「太陽のせい」と答え、判決は死刑となる。
不条理の社会にもがき苦しむ私たちは、この小説を読むことなくして、不条理を語ってはいけない。家にある新潮文庫版は、たびたび一緒に旅した為、もうぼろぼろだ。

《冒頭と結び》

きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。養老院から電報をもらった。

(中略)

一切がはたされ、私がより孤独でないことを感じるために、この私に残された望みと

いつては、私の処刑の日に大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげて、私を迎えることだけだった。

📖 後記 📖

今夏訪れたベネチア（イタリア）が大雨と暴風の為、洪水に見舞われ、被害が出ているとニュースで見ました。毎年冬になるとアクア・アルタ（高潮）といって、街の到る処が水浸しになります。その原因は、地球温暖化による海面水位の上昇と、地下水のくみ上げ過ぎによる地盤沈下といわれています。海に囲まれている街なので、やむを得ない面もありますが、あの美しい街が維持されることを願っています。ベネチアの街は車が入れないので、静かで、散歩するのに適しています。

